

エンカウンター (ENCOUNTER)

第268号

2024年8月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より（2）

「あがない」が福音の内容

「私たちは、御子にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち罪過のゆるしを受けたのである。」（エペソ1・7）

私たちはキリストにあって、神の豊かな恵み、恵みのゆえにその血による「あがない」、即ち罪過のゆるしを受けたのである。「あがない」を受けたのである。これは神の豊かな恵みのゆえにという。

この「あがない」ということが、これが福音の内容です。イエス・キリストの福音というのは、「あがない」です。「あがない」というのは、神の恵みです。この神の恵みは英語で言う Free Gift です。贈り物、プレゼントです。

プレゼントというのは、もらう方の心の状態、行ないの状態を問題としない。もらうほうでどういうふうな心持ちになれとか、こういうふうな行ないをせよとか、そんなものをゴタゴタ条件が付いておったら、そんなものはプ

プレゼントとは言わないですよ。

Free Gift、ただで下さる。こちらの心の状態いかんに関わらず、神のほうから提供してくれる。この贖い、これが福音の内容です。

福音、永遠の命は、ただで来る賜物

われわれはここでは天国の前味を味わい、ここで讚美し、聖書の真理を学んで、われわれはいかにも恵まれた状態におりますけれども、うちへ帰ればもう日々の仕事、自分の考えがまた元へ戻ります。

パウロは死ぬ前に、「我は罪人の頭」と言った。日本の源信僧都は「妄念はもとより凡夫の地体」だと言った。ことほど左様に、われわれは教会ではきれいな心になっておりますけれども、うちに帰ればもう哀れな状態です。そうですから、われわれはいよいよほめたたえるほうほうとして、称名、主の名を呼ぶことを励みたい。これが第1の感想であります。

第2の感想は、この福音というものは賜物。即ちわれわれの心の状態、われわれの行ないの状態と無関係に、神の方から下さる賜物です。すなわち、普通の場合は皆、これをするから、これをもらうということになる。しかし、福音はただで来る賜物です。プレゼントです。福音は、永遠の命はただでくる賜物です。そのことを私は特に感じます。

あがないのイエスの説明

第3に感ずることは同じことではありますが、司会者、ヨハネ伝を読んでもくれたまえ。ヨハネ伝6章53節から56節。

「イエスは彼らに言われた、「よくよく言うておく。人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。」(ヨハネ6:53-56)

あがないといたら、これです。イエスがご自分でこのあがないのことを説明なさっている。これはイエスの肉を食らい、血を飲むことです。もらう。イエスの肉をもらい、イエスの命をもらう。すなわちあがないを信ずるということは、それは称名となって、我々はとらえたらいい。

ここで話を聞けば、「なるほど、あがないだ、ありがたい」と言って、このあがないのことは信じているけれど、うちへ帰れば、もう心は妄念で、もう自分の心は自分のことばかり思っている。そうですから、あがないの信仰を続けるためにも、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と主の名を称える必要がある。

このヨハネ伝6章53-56節、このイエス・キリストの血を飲み、肉を食ら

うということは、これはあがないを信ずるということですが、それは
どうしたらいいかというと、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と称えたら
よろしい。

牧師歴の回顧

本日は10月の第2聖日に当たっておりますけれども、10月の第3聖日というものは、私にとって非常に意味の深い日曜日でございます。大正6年、1917年の10月の第3聖日に、旧制の高等学校の1年生の初めでしたが、白山教会へ始めてまいりました。これが、私が教会へ参った始めであります。

それから30年たちまして、昭和22年の10月の第3聖日、1947年に当たっておりますが、この第3聖日に初めて本所緑星教会において、牧師として初めの講義を致しました。そのときにはたぶん、今日は見えておりませんが金子長老、それに今日ご出席になっている北川姉妹、今日は八木姉妹がお見えになっていないが八木姉妹、あるいは美恵ちゃんも出席していたかもしれない。信者のお宅で話いたしましたのですが、それがちょうど30年前の第3聖日であります。

本日は第2聖日でございますので、教会へ通いはじめましてから59年、牧師を致しまして29年のこれが最終の聖日であります。人間も30にして立つと申しますが、牧師生活もいよいよ次の聖日から30年目に入らせていただきますので、神の恵みによりまして、少しく一人前になった伝道師にさせていただきたいと願っているわけであります。

奥義

「御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下さいたのである」(エペソ1・9)

これは8節と関係がありまして、8節には神の恵み、神の恵みと言えば、これは、終局的にイエス・キリストの贖いです。神の恵みと言えば、イエス・キリストの贖いです。

8節には、「神はその贖いの恵みをさらに増し加えて、あらゆる知恵と悟りとを私たちに賜り」、これは前回講義いたしましたとおり、我々に知恵と悟りとを与えて、そして贖いの恵みを増し加えるという。この言葉も注目すべき言葉でありまして、贖いの理解というのは、これは知恵です。神がわれわれに知恵と悟りとを増し加えて、贖いの深き知恵をわれわれに知らしめるという。

9節「御旨の奥義を」、奥義と言えばこれは、今まで隠れていたが、今明らかにされたものを言う。それを奥義という。これは御旨の奥義を、その今まで隠されておった御旨を、「自らあらかじめ定められた計画に従って、」お定めになった計画に従って、私たちに示して下さいたのである。これはキリストによって、神がその計画をお進めになる。キリストによってその計画をお進めになる、その計画に従って私たちに示して下さいたのである。

聖霊の証印

「あなた方もまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救いの福音を聞き、また彼を信じた結果、約束された聖霊の証印を押されたのである」(エペソ1・13)

今度は「あなたがた」という字に変わっていますが、今まで「私たちの信者が」であったが、今度はあなたがた、手紙を受け取る信者がた、受け取る「あなた方もまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き」、「あなたがたの救いの福音」というものは、これは真理の言葉です。真理の言葉である、あなた方の救いの福音を聞き、そしてその福音を信じた結果。福音というのは、イエス・キリストの贖いです。イエス・キリストの贖いを聞き、その贖いを信じた結果、約束された聖霊の証印を押されたのである。その贖いを信じた結果、約束された聖霊の証印、聖霊を与えられた。その聖霊を与えられた、証印を押された。押されたその証印は、「わが主イエスよ」とわれわれは主の名を称えるようになった。すなわち、君たちは、約束された聖霊を受けて、「わが主イエスよ」と称えるようにされた。

贖い

ここ（エペソ書第1章3-14節）に「贖い」という字が2回出て来ている。そして、7節と14節に「贖い」という字になって出ております。6節には「栄光ある恵み」と言っ、贖いという字は出ておりますが、要するにここに「贖い」という字で2回、「栄光ある恵み」で1回、3回この文章の中に贖いという字が出て来ている。

そうですからキリスト教の言う「福音」というのは、贖いのことです。ある信者が、「小西牧師は贖いという喜んでる」と言われましたが、そうです。私はもう、他のことはおっしゃらんでもよろしい。イエス・キリストの贖いと言って受け取ったら、私は嬉しい。私の伝道の目的は達せられた！

救 い

そして、それがいよいよイエス・キリストによって実現いたしました。今度は、贖いを受けるというのは、7 節「わたしたちは御子にあつて、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、即ち罪過のゆるしを受けたのである。」。これが信仰です。これが、すなわち救われたことです。わたしたちは御子にあつて、神の豊かな恵みのゆえに、その血による贖い、すなわち罪過のゆるしを受けたのである。私たちは贖いを受けた。…この世において信じて受けたあがないが、今度は 14 節で完成した。キリスト来給う時に、神につける者、即ちあがないを受けとる者が、全く贖われ、復活せしめられるためである。

そうですから、我々が信者になるということは、復活するためです。キリスト来給う時に復活して、キリストが復活し給うたと同じ復活体を頂くこと、これをキリスト教では「救い」という。それ以外を救いと言わない。我々は「救われた」と言ったら、このことを言う。ここに、「贖い」という字が 3 回出て来ております。

ほめたたえる

そうですから、この〔エペソ書第1章〕3節から14節までの大意は、「贖いをほめたたえる」ということに尽きる。贖いをほめたたえて、贖いを認めて、本当だと認めて、そしてほめたたえる。これはこの世においては信仰で、頭の心であるけれども、いよいよキリスト来給う時には、目にもの見る時です。実現する時です。これが9節から14節までの大意であります。

このほめたたえるのに、われわれは聖霊を受けて、この世においては「わが主イエスよ」と主の名を呼んで、これをほめたたえる。キリストの贖いを認める。…恵みをいただいたために、主をほめたたえるとともに、われわれ目の前におかれた義務をなして、神をほめたたえる。

この世においての方法は「主の名を呼ぶ」ということ。それから「目の前の務めをなしてほめたたえる」。目の前の務めをなすということは、これはまたロマ書の12章から14章までの講義のときに、第3回の講義の時に詳しく申し上げますけれども、すなわち神をほめたたえることになる。

キリスト教というものは、神の贖いを認めてほめたたえるということに尽きる。ほめたたえる方法は、現世においては主の名を呼んで、目の前に置かれた義務、すなわち神の意志をなすことだけです。われわれは来世において、キリスト来給う時に、復活体を頂いて、ほめたたえるときには今度は無限の体をもって、無限の善行をもって神をほめたたえる時が来るだろうと思う。

神、キリスト、聖霊

[エペソ書第1章] 3節から14節のこの one sentence、10の文章の中に、神、キリストという字が34回出て来ている。これは私10年前に数えたので、「神」という字が名詞で2回、隠れた主語として4回、代名詞として12回、計18回出て来ている。「キリスト」という字が名詞で6回、代名詞で7回、計13回。「聖霊」という字が名詞で2回、代名詞で1回、計3回。合計34回。これが、一つの文章の中に「神」「キリスト」「聖霊」という字が34回出て来ている。

ことほどさようにキリスト教というものは、神、キリスト、聖霊です。われわれという字は、ほめたたえるというだけです。ほめたたえるというのは難しくない。認める、認めて、神の恵みを recognize するだけです。われわれクリスチャンのキリスト教の信仰と言うのは、キリストの贖いの深さ、尊さ、その恵みの深さを知らせて頂くことだけであり、これをクリスチャン・ライフという。